

問いかけ

大災害が発生したとき、目の前の家族や子供たち、そして仲間を守れますか。
守るために必要なのが何なのか知っていますか。そして、必要なものを準備
していますか。

知識、知恵、情報、テクニック、対策、etc.

これらを準備しておけば、災害から必ず守ることができると思いますか。
いいえ。そうとは言い切れません。

知識やテクニックを身につけ、そして対策を講じていても、“適切なものの
考え方”がなければ丸腰同然です。使い方のわからない道具のコレクションと同
じことです。

この本では、災害の国・日本の住人が是非身につけたい“ものの考え方”や
“危険を嗅^かぎ分ける感性”について話をしていきます。

これらを身につけ、我が身も、家族も、園児・児童・生徒も、そして仲間も
守ることにします。

はじめに

子供や年老いた父母・祖父母を守る世代の方々へ。

園児・児童・生徒の生命を守る教職員の方々へ。

そして、

企業、団体、地域組織の、防災担当者として重責を担うの方々へ。

この本は、防災・減災に必要な“ものの考え方”を紹介しています。

災害のメカニズム、対策の手順、防災教育の手順などは、数多くの書籍が出版されています。そして、インターネットでも多くの情報が開示されています。

そのような中ですが、あえて災害に対する適切な“ものの考え方”を皆さんにお伝えしたいと思います。

なぜ、いま、“ものの考え方”なのでしょう。

それは、災害に対する心構えが“見当違い”であることが多いことに驚かされたからです。筆者が講師を務めた防災講演、様々な立場の方々と交流した現場、さらにはテレビやラジオのスタジオで。

防災・減災や災害に対する認識が“完全に勘違い”であると言える状況でした。

「自然災害多発国・日本の住人として当然知っているだろう」と思っていた基礎的な心構えさえ、多くの方々には“初耳”、もしくは“目から鱗^{うろこ}”のようでした。

防災を専門とするの方々。現役の消防指令、航空自衛隊OB、阪神・淡路大震災や東日本大震災の現場で活動された地域リーダーや防災専門家。このような方々と意見を交わすうち、筆者の驚きは焦りとなってきました。

「このままでは手遅れになる！」

「防災・減災とは何か」をわかっていない人たちが、家庭、そして学校で防災教育に携わっている。そして、企業や団体では、不安を抱えたまま形どおりのマニュアルを整え、儀式のように避難訓練を繰り返している。

しかし、このような批判では何も変わりません。

そうです、嘆いていても何も変わらないのです。やがて巨大災害が襲いかかってくることになります。そして、手遅れとなります。

「手遅れになる前に！」

この本では、災害に対する適切な“ものの考え方”を整理しています。研究者として、技術者として、20年間にわたり防災・減災に携わってきた筆者の経験に基づくものです。

我が身と家族、園児・児童・生徒、そして仲間を守るために知っておいて欲しい必要最小限の情報です。

この本が契機となって、防災・減災に相応しい“ものの考え方”を、適切な備えを、いち早く、そして長く継続できるように。さらに、災害発生時に「生き残るために相応しい判断と行動」が速やかに行えるように。

21世紀に入ってから多くの災害が発生し、多くの方が被災されています。

毎年どこかで水害や土砂災害が発生しています。そして、近い将来、巨大地震も発生すると考えられています。

備えてください！ 適切に、そして継続して備えてください！

心からそのように願っています。

本書の構成

この本は全7編で成り立っています。

第1編では、自分と自分の周りの人たちの命を守るための基礎的な心構えを解説します。

第2編では、災害現場においてジレンマに^{おちい}陥り、不十分な対応が強いられる局面を解説します。

第3編では、平常時では当たり前な社会常識、予定や計画などが、災害が発生すると、脆くも崩れ始め、すぐには、そして簡単には修復できないということを解説します。

第4編では、準備段階における専門家や情報の活用の仕方について解説します。

第5編では、「防災教育」に悩んでいる学校教職員の皆さんへの提案です。

第6編では、災害がもたらす被害、災害への対応方法、災害に対する心構えを紹介します。

第7編では、被災後に直面するいろいろな局面から、私たちに必要な覚悟について解説します。

巻末には、ホームページや動画の検索キーワードを参考資料として掲載します。

この本は、初めから読んでいただいても、すぐに気になるところを読んでいただいても構いません。

この本が皆さんの意識改革のきっかけとなり、具体的な、そして的確かつ継続的な備えにつながると信じています。

第 1 編

あなたの“ものの考え方”は “安全”に^{ふさわ}相応しい？

ここでは、自分と自分の周りの人たちの命を守る基礎的な心構えについて解説します。

1. 惨劇を招くかもしれない“ものの考え方”

- ▶ あなたは災害に備えていますか
- ▶ 「まだ、していません」、「何もしていません」と答えるあなた

⇒ それは、すべてを失う準備、後悔する準備をしている人と同じです

毎年発生する水害や土砂災害。そして、数年ごとに大きな被害をもたらす地震。

これらの天災は、“備えておけば被害を軽減できる”ということを多くの人が知っています。

でも、対策を行っていない、あるいは先送りしている、のが現実です。

まだ、していない”という回答には、「まだ間に合う」という潜在的な気持ちが垣間見えます。

では、重ねて質問してみます。

「では、いつするのですか」

“何もしていない”という回答は、「良いこと・好ましいことはしていないが、悪いこと・不適切なこともしていない」という“言い訳”のニュアンスが色濃く聞こえます。そこで、もう一つ質問してみましょう。

「本当に、『何もしていない』と言える状態ですか」

災害が、あなたとあなたの周りの人に襲いかかったときを想像してみてください。

自分の体の自由を失い、家族を失い、資産を失い、思い出の詰まった家・写真などを失うかもしれません。すべてを失うことも考えられるのです。

「まだ」、「何も」していないで、いいわけがありません。

過去から、現在、そして、未来に向かって、進行形で、“やってはいけない準備”をしているのです。

“やってはいけない準備”。

それは、

命を失う準備！

資産を失う準備！

すべてを失う準備！

そして、

後悔しかできない惨状に呆然とする準備！

です。

そのとき、みんなこう思うことでしょう。

「備えておけばよかった」と。

災害に対して「何もしない」という“現状維持”や“保留状態”はあり得ないことなのです。

被害を軽減するために備えを継続するか、備えを怠ってすべてを失うのか、二者択一です。

備えなければ、取り返しのつかない惨劇に遭遇することになります。目の前で家族、園児・児童・生徒の命、そして仲間の命が失われる惨劇を呆然と見詰めることになり、後悔するだけです。

改めて質問し直します。

「あなたは、被害を軽減するために相応しい備えをしていますか」

2. 備えがなければ、何もできない

- ▶ 災害に備えていないあなた。「そのときは、そのとき！ どうにかなるさ」と考えていませんか
- ▶ どうにかなるのであれば、今までの被害ももっと小さくなったはず

⇒ **どうにもならないのが現実。どうにかすることを考えるのも現実**

水害を例にとってみます。

あなたは、家やその周辺、通勤・通学路、買い物ルートなどで水害に遭う可能性を考えたことがありますか。

迫り来る水からどう逃げるのかイメージしたことがありますか。

足を踏み外して水路や側溝に落ちることを“想定外”としていませんか。

土砂災害の場合はどうでしょうか。

あなたの家のそばに斜面や崖はありませんか。

そこが危険箇所指定されているかどうか、確認していますか。

家が緩やかな斜面に立地している場合に山側の崖や周辺の山地河川の存在と危険性を確認していますか。

たとえそれが 100 m、200 m 離れていても確認していますか。

「きっと大丈夫だろう」という素人判断では確認したことになりません。専門家や自治体の情報を確認したことがありますか。

そして、大雨や長雨が発生したとき、避難行動を開始するタイミングについて、家族と一緒に確認していますか。



写真1 住宅に流入した土砂〔平成22（2010）年の梅雨期における大雨災害〕
（災害写真データベースより）



写真2 土砂災害現場〔平成21（2009）年7月の中国・九州北部豪雨〕（災害写真データベースより）

では、地震の場合はどうでしょうか。

揺れに対抗するためには、「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」環境を準備しておき、いつ何時の揺れにも速やかにこの3条件を満たした空間に逃げ込むことです。そのためには、安全な空間を確保することが必要になります。

家庭で、職場で、音楽ホール・教会、繁華街・アーケード街、駅構内などの外出先で、あなたは「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」環境を意識していますか。



写真3 雑居ビルの被害の様子（阪神・淡路大震災）（災害写真データベースより）

外出先の建物の耐震性が低くかったり、揺れ対策をしていなかったりした場合、あなたとあなたの家族の身を誰が守るのか、考えていますか。

まずは、あなたとあなたの家族がその危険に遭遇することがあるということを認識してください。認識していないで危険に遭遇すると、ただ狼狽^{うろた}えることになります。そして、何かを失うことになります。

危険を認識している場合は、それが“いつ起こるのか”を設定して、具体的な行動手順を考えてください。

いつ起こるのか。

平成何年何月何日というような、具体的な日付のことではありません。考えるべきことは、起きる時間帯のことです。

家族が一緒にいるときですか。

それとも真っ暗闇の夜ですか。

あるいは、

日中で、家族が個々に行動しているときですか。

さらに自問自答してください。

何が危険ですか。

どこが危険ですか。

どこに逃げるのですか。

どこを通れば安全に避難できますか。

何を持っていけばいいのですか。

どの一つを取っても、事前に備えていなければ、わからないもの、準備できないものです。

「そのときは、そのとき！ どうにかなるさ！」と思っているあなた！

これまでには、多くの方々が災害で命を落としました。それは、“どうにもならなかった”からです。

事実はどうです。

「そのときにできたことは、事前に備えておいたことだけ。どうにかなったのではなく、どうにもならないのが現実！」

天災は、万が一ではなく、確実に起こります。

確実に起こるので、備えておいて損はない！と断言できます。

是非、“事前の準備”と“対策の日常化”を心がけてください。